女性助祭は実現するか

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

女性助祭は実現するか

5月12日、5大陸で50万人の女性聖職者の上位幹部800人がヴァチカンのパウロ6世ホールに集まり、ローマ法王の話を聞いた。その後、その中の一人の女性がマイクに近寄り、次のように法王に尋ねた。「なぜ教会は女性助祭を認めないのか。歴史的には初期の数世紀間は女性の助祭がいたのに。」法王は次のように答えた。「それを受け入れ実現しましょう。それに関する委員会を作って話し合いをさせ、ゆくゆくは女性助祭の永遠化をはかりたい。」「その頃女性助祭はいかに教会の祭儀に寄与したのだろうか。」「助祭はイタリア語でdiaconoというが、奉仕するというギリシャ語の言葉から来ている。聖書の宣布や、説教、洗礼の主催、結婚の祝福ができるようになるのだ。」

これは女性司祭へと発展するだろうか。それについては前々法王ヨハネ・パウロ2世は有り得ないと断言している。しかし、2003年に、故カルロ・マリア・マルティーニ枢機卿はいずれヴァチカンでも女性司祭を認めるべきだと発言している。現法王の発言を受けて、ローマ教皇庁立アントニアヌム大学の学長で神学者のメアリー・メローネ氏は、これは一歩前進であり、法王の希望を表したものであると語っている。

この法王の発言を聞いて多くの聖職者は困惑しているようだ。その数日後、私はウクライナ大司教やイタリア北東部の聖職者3人と会う機会があり、この件についてどう思うか尋ねてみた。答えは一様にノーだった。長い伝統を持つ制度に改革の楔を打ち込むのがいかに難しいかを垣間見た思いがする。

この件について、元教義省長官のドイツ人枢機卿ヴァルター・カスペル氏（83歳）は次のように述べている。

> これは難しい問題だ。神学者の間でもよく議題になり、話し合ったが、問題は広く深くなかなか結論には達しない。2003年には前法王ラッツィンガーも討論に加わった。問題はまだ残っているのだ。聖パウロは女性助祭についてロマ書の中で語っている。女性助祭を認めると、次に必ず女性司祭の問題が出て来る筈だ。助祭は洗礼や結婚式を誘導することはできるが、ミサを主催することはできない。女性助祭の容認は、正直に言って、できない。現法王フランシスコといえども前々法王の決定を覆して女性司祭登用ということはありえないだろう。

教会よ貧しくあれ

5月16日に開かれたイタリア司教会議の挨拶で法王は、教会聖職者は貧しく、清くあれと述べた。永遠の聖霊の若さを保つためには、身軽にしなければならない。神の御声を説く者は必要最低限のものが有れば十分だと述べた。

2013年、フランシスコが法王に決まり、サンピエトロ教会2階中央のバルコニーから挨拶した時には、そのシンプルな姿勢、行動に広場に集った人々やテレビを見ていた人々から共感を得た。その時、法王が身につけていたものは歴代の法王が身につけていたものとかなり違っていた。これまでの法王は金の十字架のネックレスを首にぶら下げていたが、現法王は銀の十字架のネックレスだ。それは未だに変わらない。歴代の法王は赤い綺麗な靴を履いていたが、現法王は黒で質素な靴を履いていた。自分のメガネを選ぶ際には、町の普通のメガネ屋さんに行って安いメガネを自ら選んでいた。側近のものは驚いてしまったという。

法王は、この挨拶において、「宗教者の道は貧の行進である、それは決して自殺への道ではない。」「キリスト者は神の教えに従う義務がある。食事の節制も心がけ、財産を振り回すようなスキャンダルは謹んで欲しい」と懇願した。さらに、5月7日土曜日の「アフリカの医師団」との会合においても、「『神は私に益々貧乏になれ』と言われる。そうなれるように皆さんも私のために祈って下さい」と語っている。

枢機卿たちの豪華住宅

ヴァチカンの財政問題に絡んで、枢機卿たちの住居の広さ、豪華さが話題にされている。そのやり玉にあがった筆頭がヴァチカンの前国務長官タルチジオ・ベルトーニ氏だ。ヴァチカンのある建物の屋上に彼の住居があり、彼はそれを約9億円かけて補修した。そのうち、3億円超がヴァチカンの小児科専門病院のバンビーニ・ジェスー基金が流用されていた。彼の住居は700平方メートルの広さがあるとも噂されるが、本人は296平方メートルと言い、他の枢機卿の中には自分より広い住居を持つものもあると言って、少しも悪びれるところがない。枢機卿の中で一番広い住居を持っているのは93歳のエチガレー枢機卿で、472.05平方メートルの広さだ。400平方メートル以上の住居の所有者は5人いる。多くの枢機卿たちは、自分の出身国の修道女たちを住まわせている。アフリカ出身のアリンゼ枢機卿は353.50平方メートルの住居を持っているが、多くのアフリカ出身の修道女を同居させている。また、土地の広さを含めれば、ドメニコ・カルカニョ枢機卿はラウレンティーナ街道筋に20ヘクタールの緑の中に居住している。

同性婚が法令化された後の教会の反応

イタリアの国会は5月11日、同性愛者の結婚を容認する法令を成立させた。アルゼンチン出身の法王は政治は政治、宗教は宗教と分けているが、イタリア司教会議の反応は鋭い。議長のバニャスコ枢機卿は、このままでは他人に子宮を貸与するような事例も出て来るだろうとイタリア政界のあり方を批判した。司教会議の前議長ルイーニ枢機卿は次のように述べている。

> 今回の法の成立に、私は否定的だ。生物学的にも心理学的にも倫理学的にも、以前はあちこちで否定されていたものが、今では公認されるようになっている。これは人間性にとっても、イタリアにとっても大きな問題だ。もちろん教会にとっても大きな問題だ。無関心ではいられない。我々聖職者も、その問題を真剣に人々に訴えて来た。特に家族問題として訴えて来た。現在のイタリアの問題は人口問題でもある。それに対して危機を感ずる市民は少ないようだ。正しく少子高齢化社会だ。子供は将来を意味する。市民はそれが分っていない、そのため出生率が一向に上がらない。

また、ペルージャ教区長バッセッティ枢機卿は次のように語る。

> 司教たちは戦わない。我々は福音の原理を前進させるのだ。家族に訴えるのだ。我々は家族について今まではっきりと進む方向を示して来なかった。イタリアの家族はもっと子供を生むことについて真剣に考えた方が良いだろう。最近の1年間の死亡者が65万3千人だが、出生児は48万8千人だ。そこへ同性婚、子供の出生がさらに減り、国の滅亡へと進んで行くのだ。そこから考え直そうではないか。